

『太上玄一真人說勸誡法輪妙經』 (『法輪妙經』B)

訳注ノート (二) (テキスト2-4)

『法輪妙經』読書会 (林佳恵・浅野愛)

【テキスト2-1 (二丁目裏二〜三丁目表八)】

道言。「夫受滅度、因縁不絶、得生人道、聲色端偉、相好具足、才智明達、解了玄義。或生貴門・王侯之家。或爲人尊、四海所崇、男爲國主、女爲妃后、世生貴子、代代不休。或生於富室、財寶充足、凡百施爲、無所饑乏。如此之德、皆由其前身行業積善願念所致。或處在窮厄、不泰之地、艱辛憂惱、愁苦難忍、乃發願慈心、思念作善、竭力建功、施種福田、割已救物、損身度人、忍饑守廉、不敢怨天、心不念殺、口無惡言、敬愛道士、唯善而行、功滿德備、一滅一生、其福無量、得如今之報。若能又於今生、抗志易韻、棄祿學道、宗師受經、長齋(注1)念眞、不妬不害、緘口慎言、愛師重寶、存詠不忘、當藉先世之基、二滅二生、便得神仙。三宮九府(注2)記人功過、毫末必戴、萬無差失。其願既定、志亦難奪。故倚伏難窮。所謂法輪之門」。

【テキスト2―1（二丁裏二〜三丁表八） 訓読】

道言ふ。「夫れ滅度を受け、因縁絶えず、人道に生まるるを得て、聲色は端偉、相好具足し、才智明達にして、玄義を解了す。或ひは貴門・王侯の家に生まる。或ひは人尊と爲り、四海の崇ぶ所となり、男は國主と爲り、女は妃后と爲り、世に貴子を生み、代代休まず。或ひは富室に生まれ、財寶充足し、凡そ百施を爲して、饑乏する所なし。此くの如きの徳、皆な其の前身の行業して積善し願念するを致す所に由る。或ひは處るに窮厄、不泰の地に在り、艱辛憂惱あり、愁苦忍び難ければ、乃ち慈心を發願し、思念して善を作し、力を竭して功を建て、種を福田に施し、已を割きて物（もつ）を救ひ、身を損ひて人を度し、饑を忍び廉を守り、敢へて天を怨まず、心に殺を念じず、口に悪言無く、道士を敬愛し、唯だ善のみ行なひ、功滿ち徳備はれば、一滅一生して、其の福無量、今の如きの報ひを得たり。若し能く又今生に於いて、志を抗げ韻を易へ、禄を棄て道を學び、師を宗び經を受け、長齋して眞を念じ、妬まず害さず、口を緘じ言を慎しみ、師を愛し寶を重んじ、存詠して忘れざれば、當に先世の基に藉り、二滅二生して、便ち神仙を得べし。三官九府、人の功過を記し、毫末も必ず戴するに、萬に差失無し。其の願ひ既に定まれば、志も亦た奪ひ難し。故に倚伏して窮し難し。法輪の門と謂ふ所なり」と。

【テキスト2―1（二丁裏二〜三丁表八） 現代語訳】

道はこのように言われた。「そもそも悟りを開いて苦しみを滅して煩惱の海を渡り、善い縁は絶えるこ

とがなく、(天・人・畜生・餓鬼、地獄の五道のうちの)人の道に生まれることができ、声や顔つきは端正で威厳があり、身体は一つとして欠けるところがなく、才能や智恵は大変優れていて、(道の)深い教義を理解する。或いは貴族の一門や王侯の家に生まれる。或いは人の尊ぶ存在となり、天下が恭しく重んじるところとなり、男であれば国主と為り、女であれば妃后と為り、世の中に貴い子どもを生ま、そのようなことが代代続く。或いは裕福な家に生まれ、財宝は満ち足り、凡そ百回施しても、飢えたり貧乏になつたりすることはない。このような徳は、皆なその前世の身が修行して善行を積み念願したことに由るのである。或いは貧しくて生活に困り、穏やかでない地に住んでいて、困難で辛く憂いや悩みがあり、思い悩んで苦しみが耐え難ければ、そこで慈しみの心を起こす誓いを立て、深く細かく考えて善行をし、力を尽くして功德をおこして、善行という種を福德をもたらす下地である福田に播き、自分の持っている分を割いて衆生を救済し、我が身の利益を減らして人を悟りの岸へ渡し、ひもじさに耐えて清廉であることを守り、敢えて天を怨まず、心に人への殺意を思うことなく、悪口を言わず、道士を敬愛し、唯だ善行だけを行ない、功德が満ちて備われれば、一回転生すると、その福は無量であり、今のような報いを得るのである。もしまた今生に於いて、志をまつすぐに持って物事のおもむきを変え、世俗の官吏の禄を棄てて道の教えを学び、師を敬い重んじて経典を受け、長齋して真理を心に念じ、(人を)妬まず傷つけず、口を閉じて言葉を慎しみ、師という宝を愛し重んじ、瞑想して(経を)詠誦して(そのことを)忘れなければ、必ず前世(の行い)に基づいて、二回転生すれば、便ち神仙となる

ことができる。天上界の三官九府（の役所）は、人の善行悪行を記録するのに、ごく些末なことも必ず記載し、万一にも誤記や記録漏れはない。その願いが既に定まっていれば、その志もまた奪うことは難しくなる。それで禍福が互いに生じても窮し難いのである。（これが）法輪の門と謂う理由である。」

【テキスト2—1（二丁裏—三丁表八）語釈・注釈】

（1）長齋…道士が己の修行として行う齋。その期間の長いものを言う。東晋初の葛洪の『抱朴子内篇』巻十五「雜應篇」（『抱朴子内篇校釋』王明撰（増訂本）中華書局、二〇〇二年、二七五頁）には、山に登って疲れない方法として、「凡乗躡道有三法。一曰龍躡。二曰虎躡。三曰鹿盧躡。（中略）又乗躡須長齋、絶葷菜、斷血食。一年之後、乃可乗此三躡耳。（凡そ躡に乗る道に三法有り。一に曰く龍躡。二に曰く虎躡。三に曰く鹿盧躡。（中略）又躡に乗るには須く長齋し、葷菜を絶ち、血食を斷つべし。一年の後、乃ち此の三躡に乗るべきのみ。）」とあり、三種の空飛ぶかごである龍躡、虎躡、鹿盧躡に乗る方法を挙げ、そのかごに乗るためには一年間の齋をして、その間、匂いの強い野菜や肉食を絶つて素食を守ることが述べられている。ここでは、一年の期間、素食して齋を行うことを「長齋」と述べている。『法輪妙経』Bのテキスト4にある「無上八門開度法輪偈頌」にも、「長齋幽阜」と「長齋」の語が見え、その後に「不倦晝冥 切栢中餐 素水兼瀟」とあり、昼夜倦まず齋を行い、栢の葉を食事とし、ただの水を飲むことが見え、ここでも長齋は素食して行うものとなっている。（「長齋」について

は、『論叢アジアの文化と思想』第三十一号(二〇二三年)掲載の「『太上洞玄靈寶眞一勸戒經』訳注ノート」(林佳恵・浅野愛)の注33も参照のこと。()

(2) 三宮九府・天界の役所のこと。『法輪妙経』Bでは、「三宮九府記人功過」とあるが、古靈宝経(東晋末劉宋期にかけての成立と推測されている道教經典群)の一つ、『太上大道三元品戒謝罪上法』(HY四一七)には「三宮九府百二十曹、考逮削落黒簡、斷絶宿根(三宮九府百二十曹、考逮して黒簡を削落し、宿根を斷絶す)」(十六丁表)とある。この經典では、天上界のいずれかの録目に記されている自分の犯した罪を謝し、許しを請い、罪ある者として記されている黒簡を削除することを請う謝罪法が説かれている。古靈宝経が作られた当時には、この「三宮九府」が人の善悪功過を司る所として考えられていたことがわかる。

【テキスト2-2 (三表九く三裏七)】

道言。「諸道士及百姓子男女人、或生而好道、奉師受經、於家修奉、施安高座、朝夕朝禮、齋直(注3)燒香、無有懈怠、愛好三寶、恒如饑渴。廢家翫樂、不務生業、不殆不害、不淫不殺、守情忍色、所營在法。如此之行、皆由其前身、供養道士、勸助師宗、奉香然燈、建立福田、損身施惠、救厄卹貧。功滿德普、一滅一生、得如今之業。從此不退、便坐致神仙、縱道業未備、運應更輪、尅得尸解、會成眞人也」。

【テキスト2―2 (三表九〜三裏七) 訓読】

道言ふ。「諸の道士及び百姓子男女の人、或ひは生れて道を好み、師を奉じ經を受け、家に於て修奉し、高座に施し安んじ、朝夕に朝禮し、齋直し焼香し、懈怠有ること無く、三寶を愛好すること、恒に饑渴するが如し。家の翫樂を廢し、生業に務めず、姪(ねた)まず害さず、淫せず殺さず、情を守り色を忍び、營むところは法に在り。此くの如きの行、皆な其の前身の、道士を供養し、師を勸助し宗び、奉香し然燈し、福田を建立し、身を損ひて恵みを施し、厄を救け貧を卹(すく)ふに由る。功滿ち徳普くせば、一滅一生して、今の如きの業を得たり。此れに従りて退かざれば、便ち坐して神仙を致し、縦ひ道業未だ備はらざるも、運應に更に輪り、尅く尸解を得て、會(かなら)ず眞人と成るべきなり」と。

【テキスト2―2 (三丁表九〜三丁裏七) 現代語訳】

道はこのように言われた。「諸もろの道士及び一般の男女の人々は、或る者は生れてから道(の教え)を好み、師を大切にして仕えて經を受け、家で修行して(道を)奉り、高座に(座る道士に)布施をして心を穏やかにし、朝夕に拝礼し、決まった時日に齋を行い焼香し、怠たることが無く、(道宝・經宝・師宝の)三宝を愛(いつく)しみ好むことは、いつも飢え渴いた者が食料や水を求めるかのようにである。家の娯樂をやめ、(世俗の)生活のための仕事に励むことをせず、(人を)姪(ねた)んだり傷つけ

たり、みだらなことをしたり殺生をしたりせず、心の動きを制御し色欲を抑え、教えにあることを行う。このような行いは、皆なその人の前世に、道士を供養し、師を勧助して敬い、香を奉じて灯火をともし、福德ある功德を立て、自分の持てる物を削って（それで人々に）恵みを施し、災厄（に遭った人）を救う貧しい（人）を救済したことによるのである。功德が満ちて行き渡ったので、一度転生すること、今のような所業を得たのである。これによって退くことがなければ、そこで坐したまま神仙になることができ、たとえ道の教えが未だ備わっていなくても、運は必ず更に廻って、首尾よく尸解（仙）となつて、必ず真人と成ることができるのである。」

【テキスト2―2（三丁表九〜三丁裏七）語釈・注釈】

(3) 齋直…道教において、決まった時日に齋を行うこと。道教では、一年に六月の齋月とひと月に十日の齋日がある。『三洞珠囊』（HY一―三一）巻五、「長齋品」九丁裏に引く『太真科』に依れば、齋月は、一月、三月、五月、七月、九月、十一月。齋日は、一日、八日、十四日、十五日、十八日、二十三日、二十四日、二十八日、二十九日、三十日。この十日の齋日に行う齋を「十直齋」という。なお、『弘明集』巻十三に収める東晋の郗超（三三六〜三七七）の『奉法要』には、「已行五戒、使修歳三月六齋（已に五戒を行ひ、歳三月六の齋を修せしむ）」（大正大蔵経第五二巻、八六頁b）とあり、東晋期の仏教では、年間に一月、五月、九月の月前半に齋を行う「歳三」の齋月、及び月の八日、十四日、

十五日、二十三日、二十九日、三十日の六日の「月六」の齋日が規定され、定められた時日に齋が行われていたことが判る。道教の齋直は『三洞珠囊』の記述を見ると、この仏教の「歳三月六」の齋と同じ時日を含む形になっていると言える。これについては、王皓月氏の博士論文『靈宝経の研究』（二〇〇二年、早稲田大学）の補論「『旨教経』の成立と内容」の五、「六月齋と十日齋」を参照のこと。

【テキスト3（三丁裏八〜四丁裏二）】

道言、「吾歴觀諸天、從無數劫來、見諸道士百姓子男女人、已得無上正眞之道、高仙眞人、自然十方諸聖、皆受前生勤苦、求道不可稱計。投身棄命（注4）、無有有限量、廣建功德、發大乘之心（注5）、長齋苦行、市諸香油、然十燈百燈千燈無量之數、光映十方（注6）、照耀諸天、唵冥普消。金寶珍貨、以散道路、供給窮乏、損身割已、奉師效心、無悋惜心、念前生不得。如今當盡心、開度衆生、預是鳥獸、莫不歸仁。於是惠澤流溢、功感諸天、身得金剛七十二相（注7）、項負圓明、洞映太空（注8）、位登高仙。此福巍巍、難可稱述。如此之比、有無缺之數。皆積行所得、非唯一生學而成也。來生爲學、入吾法門、當瞻之先世、以期神仙。功滿德普、尅入自然至眞之場（注9）也。今說法輪偈頌三篇（注10）」。

【テキスト3（三丁裏八〜四丁裏二）訓読】

道言ふ、「吾は諸天を歴觀し、無數の劫從り來（このかた）、諸々の道士百姓子男女の人を見るに、已得

無上正眞の道、高仙真人、自然十方諸聖、皆な前生に勤苦を受け、道を求むること稱げて計かるべからず。身を投じ命を棄つること、限量有る無く、廣く功德を建て、大乘の心を發し、長齋し苦行し、諸々の香油を市（か）ひ、十燈百燈千燈無量の數を然せば、光は十方に映え、諸天を照耀し、唵冥普く消ず。金寶珍貨、以て道路に散じ、窮乏に供給し、身を損ひ己を割き、師を奉じて心を效し、悋惜する心無く、前生に得ざるを念ず。如し今當に心を盡し、衆生を開度せば、是に預る鳥獸の、仁に歸せざるは莫し。

是に於ひて惠澤流溢し、功は諸天に感じ、身に金剛七十二相を得、項に圓明を負ひ、太空に洞映し、位は高仙に登る。此の福巍巍として、稱げて述べ難し。此くの如きの比（たぐい）、無缺の數有り。皆な行を積み得る所、唯だ一生學ぶのみにて成るに非ざるなり。來生に學を爲し、吾が法門に入るは、當に之を先世に瞻（み）て、以て神仙を期すべし。功滿ち徳普くせば、尅く自然至眞の場に入るなり。今法輪偈頌三篇を説く」と。

【テキスト3 (三丁裏八〜四丁裏二) 現代語訳】

道はこのように言われた。「私は諸天を歴觀し、無數の劫より以來（の長い間）、諸々の道士や一般の男女の人々を見てきたが、已に無上正眞の道を得たもの、高仙真人、自然十方の諸聖は、皆な前世で勤苦を受けながら、道を求めてきたことは数えあげることができない。身を投じて命を棄てることに、限りがあることは無く、廣く功德を建てて、（衆生を救済しようという）大乘の心を發揮し、長齋し苦行

して、諸々の香油を買い求めて、十燈百燈千燈と無量の数の灯火をともせば、光は十方に映え、諸天を明るく照らし、暗いところは普く消える。金や珍しい宝物を、道路に散じて、窮乏するものに供給し、自分が多少困ろうとも自分の持てる物を割いて（それを施し）、師を奉じて心を（求道に）寄せ、惜しむ心は無く、前世で得られなかったことを思う。もし今まさに心を盡くして、衆生を開度すれば、開度を受けた鳥獸で、仁に歸さないものはないであろう。ここにおいて恩恵は溢れ流れ、功は諸天に感応し、その身には金剛七十二相を得て、項には円形の光を負い、大空をつらぬいて照り輝き、高仙の位に登る。この福は高く大きく、言葉にすることも難かしいほどである。このような例は、数限りなくある。皆な修行を積んで得る所であり、唯だ一たびの生涯の間に學んだだけで成ったものではない。來生に（道を）學んで、我が法門に入るには、當にこのことを前世に見て（知り）、そうして神仙となることを期待すべきである。功德が普く滿ちれば、自然な状態で、且つ至って真なる場所（無為の境地）に入ることができよう。（そこで）今法輪偈頌三篇を（そなたに）説くことにしよう」と。

【テキスト3（三丁裏八〜四丁裏二）語釈・注釈】

（4）**投身棄命**…この句に続いて、「無有限量、廣建功德、發大乘之心」とあり、修行をする者が功德を積み、また道を求める一つの方法として、「投身棄命」とすると解釈できる。このような「投身」の例として、古靈宝經の『太上洞玄靈寶赤書玉訣妙經』卷下（HY三五二）一丁裏〜二丁にかけて、阿丘曾

という女性が道を求めて火の中に身を投じ、それにより直ちに男身となり、道（太上道君）の前に至る、という話が見える。ここで阿丘會は、「投身火中」するに先立って、「今遭幸會、身觀天尊、歸身十方天中之天。願賜禁戒、遵承法文、拔諸惡根、早得轉輪、改爲男形。萬劫之後、冀得飛仙（今幸會に遭ひ、身は天尊を觀ぜば、身を十方天中の天に歸せん。願はくは禁戒を賜り、法文を遵承し、諸惡の根を抜き、早く轉輪するを得て、改めて男形と爲らんことを。萬劫の後、冀はくは飛仙を得んことを）」（二丁表）と言上している。同様の「投身」の例は他にもあり、古靈宝經の『太上洞玄靈寶眞文度人本行妙經』（敦煌文書P三〇二二v）、『中華道藏』第三卷三〇八頁下段〜三〇九頁中段参照）には、東方安寶華林青靈始老帝君について、幾度も転生を繰り返し、女身に生まれた時に早く転生して功德を更に重ねる為に、蒼海の深い淵に身を投じ、男身を得て「道」の前に至ったことが述べられている。即ち、「今當投身碧海、沒命於天、冀我形魂早得轉輪、更建功德萬劫之中。冀見道真（今當に碧海に身を投じ、命を天に没して、我が形魂早く轉輪を得て、更に功德を萬劫の中に建つるを冀ふべし。冀はくは道真に見えんことを）」（三〇九頁中段）とある。二つの經典で、女性が功德を建てる為に「投身」して男子に生まれ変わり、「道」の前に到る、という共通したモチーフが見えることにも留意したいが、更に注目したいことは、火中や海中に投身して没することで、転生を早めて功德を建てる（それにより、更に登仙に至る）、という考えがあることである。『法輪妙經』でも、仙公が「投身棄命」を繰り返して功德を建ててきたことが述べられているので、「投身棄命」とは、何度も転生を繰り返して多くの功德を積

む為の方法として考えられていると見ることができよう。ここから、『法輪妙経』では、得道成仙には長時間の修行を要すると考え、その為の具体的な方法が、転生を重ねて、その間に修行し多くの功德を建てるものであったことが指摘できる。また、登仙の手段として「煉度」という概念は、まだ『法輪妙経』には見えない。これは、この經典の成立年代を推定する上で、手がかりの一つになると考える。なお、道教における得道成仙の方法は、無数の転生を繰り返しながら、その間に修行して功德を積み、その宿縁によって成仙するというものから、無数の転生を必要としない「煉度」によって成される、というものに変遷していく。これについては、先行研究として、劉屹氏の論文「靈宝経中的阿丘曾故事研究」（『漢学研究学刊』第九卷、二〇一八年、一〇四六頁）がある。

(5) 大乘之心…「發大乘之心」の表現中に見える「大乘」の語は、この經典中、「小乘」の語を以て対比させるような記述にはなっていない。このことから、この經典での「大乘」は、仏教における「小乘」に対する「大乘」、という教えの優劣を重大な問題と考えて両者の対立関係を示す用語として用いられているのではなく、単純に「すぐれた、素晴らしい」といった意味で用いられていると考えられる。古靈宝経では、概ね「大乘」の語は、そのような意味で用いられているようである。例えば、古靈宝経の『太上諸天靈書度命妙経』（HY二三）に「其道高妙、衆經之尊、養生護死、大乘法門（其の道は高妙、衆經の尊、生を養ひ死を護る、大乘の法門なり）」（一九丁表）とあり、「高妙な道」であり、

「衆経の尊ぶ」ところであるものを「大乘の法門」と述べている。これも、「大乘」を「すぐれたもの、素晴らしいもの」といった意味で用いている例と言える。また、古靈宝経の『太極真人敷靈寶齋威儀諸經要訣』（HY五三二）の十八丁表には、「多是浮華淺薄之人、聲色在心、志無大雅、好學小乘法（多く是れ浮華淺薄の人、聲色心に在り、志に大雅無く、好みて小乗の法を學ぶ）」とあり、うわべばかり飾って実質のない人は、「小乗の法」即ち、レベルの低い教えを學ぶことを好む、と述べていて、ここでは「小乗」の語が使われている。但し、「小乗の法」を好む者である「浮華淺薄之人」という表現からは、明確な「自利の人」という含みまでは見えない。これも特に「大乘」と対比させて、それより劣るものとして「小乗」を用いている用例ではない、と考える。『法輪妙経』Bのこの部分は、この後に布施をし、多くのものを救済することが述べられているので、「（衆生を救済しようという）大乘の心」と訳した。

(6) 十方…東、南、西、北の四方位（四方）と、東南、南西、西北、北東の四方位（四隅）に、上方、下方を併せた、空間の方位観念。注18参照。

(7) 金剛七十二相…金剛は、雷光、或はダイヤモンドを指し、そこから、堅固で壊れず、強力な光を放つものという意味がある。ここでの「金剛」は「七十二相」を修飾し、「堅固不壊で強力な光を放つ

七十二種の相」という意味であると解釈できる。七十二相は、真人が具足する七十二種の佳相であり、『三洞珠囊』（HY 一一三一）巻八「相好品」に引く、『大劫上經』に「上皇上古真人七十二相、八十一種好」（一丁裏）とあり、十丁には、真人が具足する七十二相が具体的に述べられている。以下、この七十二相を挙げるが、七十二相の確認を目的とするだけなので、訓訳は付けない。

又至道七十二相具足。則白日昇天者、故靈寶三部八景云。二十四相在上分者、一者兩目有雙光、二者兩眉如初生雙月、三者髮如紺青色、四者頂生雲髻如紫金印、五者頭頂四圓、六者頭部上圓下方如紫金山、七者天中光起、八者金華分中有七寶光、九者玄丹分中有雙天柱、十者太皇分中方如玉璽、十一者明堂分中圓如車輪自然白毫、十二者洞房分中有紅暈紫絡、十三者泥丸分中金精流液混合萬端、十四者兩耳如金城郭、十五者面如紅蓮圓如滿月、十六者睫如雙皇太微、十七者兩目臉如雙月上弦眼瞳清微緩而不瞬、十八者兩耳後如北斗柄、十九者鼻如金柱具三窗、二十者口如丹朱咽內三處津液流出具足無量微妙聲音、二十一者通骨駢齒、二十二者舌有金流廣長覆面、二十三者頰如師子頤如印科、二十四者頭如天柱具足三要。

靈寶三部八景二十四相在中分者、一者心具九孔孔有九毛、二者胸前如重文貝萬幅相輪字相分明、三者正身平立兩手摩膝、四者兩腋下平滿如樞星、五者身相如璇璣、六者心左如太光宮、七者心右如太玄宮、八者腹垂如懸盤、九者臍如靈寶珠、十者臍一具足三要、十一者龍顏鳳姿、十二者陰相如蓮子、十三者背平直如騰雲、十四者背左如東華闕、十五者背右如西靈闕、十六者坐如蹲龍、十七者倚如牽

牛、十八者行如鳳翔、十九者髓化成骨骨如盤龍、二十者華顏玉質、二十一者金暉紫貌、二十二者兩乳如鱷魅、二十三者兩乳下如南辰、二十四者通身紫色紅暈曜日

靈寶三部八景二十四相在下分者、一者兩足平滿如雙輪闕、二者兩足下具千輻輳輪相、三者兩足下策如天河、四者兩足指長合縵綱具足、五者兩足下有蓮花相輪登、六者兩足跟具足滿好分明、七者兩足跌高平好與跟相稱、八者兩足踝垣然、九者兩脛如雙柱、十者兩膊如覆金船、十一者一孔一毛首色柔軟右旋、十二者兩膝珂如蠶星、十三者兩膝內如騫實、十四者兩膝外如騫花、十五者膝上如玉匣、十六者股如雙玉軸、十七者兩股內如玉衡、十八者兩股外如金梁、十九者兩股上有玉光、二十者兩股通有雙骨如盤龍、二十一者金骨玉髓內外洞見、二十二者通身廣長力如金剛、二十三者色如紫金不少不乏、二十四者通身明淨洞照十方多諸智慧玄覺未然三界九道一切蒼生常願聞見也。夫大乘萬行圓滿具足七十二相、斬來人間超然、白日昇天成無上至道萬仙之宗、衆聖之尊。

以上、靈寶三部八景の上中下二十四相、計七十二相が列挙されている。これを見ると、『大智度論』（『大正大藏經』第二十五卷所収）卷四などに見える仏の三十二相の内、例えば「足下安平立相」、「足下二輪相」に該当するものが二十四相在下分の第一相「兩足平滿如雙輪闕」、仏の「手足指縵網相」に該当するものが二十四相在下分の第四相「兩足指長合縵綱具足」、仏の「正立手摩膝相」に該当するものが二十四相在中分の第三相「正身平立兩手摩膝」、仏の「大舌相」に該当するものが二十四相在上分の二十二相「舌有金流廣長覆面」であるというように、仏の三十二相に通じる相が見える。但し、

真人の相の中に、仏の三十二相がすべて完全に合致する形で含まれているのではなく、例えば二十四相在中分の「六者心左如太光宮、七者心右如太玄宮」のような、道教独自の相と言えるものが多く見える。ここから、『三洞珠囊』の「七十二相、八十一種好」と言う表現は、仏教の仏及び轉輪聖王に備わるとされる「三十二相、八十種好」を取り入れつつ、そこに道教独自の要素を加えて作られたものであると言えよう。仙公の場合は、真人なので、恐らく前掲の靈宝三部八景二十四相のような七十二相を想定して、『法輪妙経』Bでは「金剛七十二相」という表現をしていると考えられる。

なお、『三洞珠囊』巻八「相好品」十三く十四丁には、老子の具足する七十二相八十一好が列記されている。これも参考までに以下に挙げる。

其老子第九變之時、身有七十二相、應七十二氣八十一品也。七十二相者、①頭圓法天、②頂象崑崙、③伏晨盤鬱、④玉枕徐起、⑤皓髮如鶴、⑥長餘七尺、⑦虎髭龍髯、⑧素潔如絲、⑨眉如北斗、⑩色如翠綠、⑪中有紫毛、⑫長餘五寸、⑬耳無輪廓、⑭中有三門、⑮高平於頂、⑯厚而且堅、⑰兩目鏡徹、⑱日精紫光、⑲方童秀朗、⑳規中綠筋、㉑鼻有雙柱、㉒形如截筒、㉓口方如海、㉔脣如赤丹、㉕氣有紫色、㉖其香若蘭、㉗齒如含貝、㉘其堅若銀、㉙數有六八、㉚上下均平、㉛舌長且廣、㉜形如錦文、㉝玉泉充溢、㉞其味甘香、㉟其聲如金、㊱其音如玉、㊲頰似橫隴、㊳頤若阿丘、㊴籠籠日角、㊵隱隱月懸、㊶犀文直理、㊷龍顏神變、㊸金容黃色、㊹玉姿潤顏、㊺額有三理、㊻參午上達、㊼天庭平填、㊽兌面壽徵、㊾腹有白痣、㊿頤有玉丸、①項有三約、②鶴素昂昂、③垂手過膝、

⑤④ 手把十文、⑤⑤ 指有玉甲、⑤⑥ 身有緑毛、⑤⑦ 背有河魁、⑤⑧ 胸有偃骨、⑤⑨ 心有九孔、⑥⑩ 外有錦文、⑥⑪ 臍深一寸、⑥⑫ 腹軟如綿、⑥⑬ 脚方如矩、⑥⑭ 雙躡法輪、⑥⑮ 足蹈二五、⑥⑯ 指有乾坤、⑥⑰ 内滋白血、⑥⑱ 外示老容、⑥⑲ 身長丈二、⑦⑰ 遍體鮮香、⑦⑱ 行如虎步、⑦⑲ 動若龍趨。此是七十二相也。
 ⑦⑳ 左扶青龍、⑦㉑ 右扶白虎、⑦㉒ 頭生朱雀、⑦㉓ 足履玄武、⑦㉔ 身若金剛、⑦㉕ 貌若瑠璃、⑦㉖ 圓光五明、⑧⑰ 頭上紫氣、⑧⑱ 胸前眞字、此九好兼前七十二相、合成八十一好也。

ここで注目するのは、先に挙げた眞人の七十二相と異なり、老子の七十二相では、仏の三十二相に通じるものが見えない点である。老子には、元々、例えば『史記』の老子列伝に見えるような、さまざまな伝承から形成された老子のイメージがあり、寧ろ、それを核として、神仙的な特徴を考えただけではないかと推察される。

(8) 太空…大空の意。『莊子』外篇「知北游篇」に、「是以不過乎崑崙、不游乎太虚(是を以て崑崙を過らず、太虚に遊ばず)」とあり、金谷治氏はこの「太虚」を「大空」と解釈している。(岩波文庫『莊子』(金谷治訳注)第三冊(一九九六年)一六九〜一七一頁参照。)また、『中華道教大辞典』四五〇頁では、「太虚」＝「太空」の解釈を示す。(なお、池田知久氏は、同氏全訳注『莊子(下)』(講談社学術文庫、二〇一四年)三三四頁で、この「太虚」を、「道の性質のひとつを表した言葉」と解釈している。)

以上、この『莊子』の例は、「太空」の直接の注釈にはならないが、参考までに、「太空」即ち大空の意で「太虚」が用いられる例として挙げた。

(9) 自然至眞之場…「自然」にして「至眞」なる場とは、道教における無為の境地、或は「道」を得た状態、と解釈し、ここでは「自然な状態で、且つ至つて真なる場所(無為の境地)に入る」とした。

(10) 法輪偈頌三篇…現行の『正統道藏』には、『法輪妙経』Bに載せる「無上八門開度法輪偈頌」、「轉輪滅度行業偈頌」、「轉輪命根未盡偈頌」と同文の偈頌が見えるのは、『三洞珠囊』(前掲)中の、『法輪妙経』Bからの引用を除くと、『三洞讚頌靈章』(HY三一四)のみである。この文献は南宋の蔣宗瑛の号である「冲妙先生」の号が卷末にあることから、元代の成書と考えられている。『法輪妙経』Bの「無上八門開度法輪偈頌」、「轉輪滅度行業偈頌」、「轉輪命根未盡偈頌」は、『三洞讚頌靈章』では、それぞれ、「開度法輪偈頌」、「滅度行業偈頌」、「命根未盡偈頌」となっている。このことから、『法輪妙経』Bの三首の偈頌は、この經典のオリジナルと考えられる。

【テキスト4 (四丁裏三〜五丁表七)】

無上八門開度法輪偈頌曰

吾開八門（注11） 中有玉城 七寶瓊林 無根而生

金條穿互 蔭映上清 開度法輪 通眞達靈

上無不照 下無不明 見有道士 晨夕誦經

長齋幽阜（注12） 不倦晝冥 切栢中餐 素水兼瀟

躬師受法 時刻不傾 單景巖穴 獨宿孤征

與鹿爲羣 倚林棲形 窮獸對躡 飛鳥哀鳴

風雲淒切 萬枯沉零 凝冰填澗 素雪翳庭

寒癘切肌 執志殊精 契闊林岫 艱苦備嬰

勞不敢倦 極不敢寧 展轉求道 遂感皇情

丹書綠字 列圖玄名 神仙羽服（注13） 錦帟飛青

鬱然而降 煥落火鈴（注14） 流霞丹輿 三素飛輶（注15）

入我八門 乃知死生（注16） 皆由積行 苦哉有情

此一偈出太上玄臺高上老子（注17）。歷觀八極（注18）、謂之八門、而誦此篇也。

【テキスト4（四丁裏三〜五丁表七）訓読】

無上八門開度法輪偈頌に曰く

吾れ八門を開けば 中に玉城有り 七寶瓊林 無根にして生ず

金條穿互（せんご）し 上清を蔭（おお）ひ映す 法輪を開度せば 眞に通じ靈に達す

上（かみ）照らさざるは無く 下（しも）明らかならざるは無し 道士有るを見るに 晨夕誦經す

幽阜に長齋し 晝寔倦まず 栢を切りて中餐とし 素水もて濡を兼ね

師に躬して法を受け 時刻傾かず 單り巖穴を景し 獨り宿り孤り征く

鹿と羣を爲し 林に倚りて形を棲まわす 窮獸對蹲し 飛鳥哀鳴す

風雲は凄切にして 萬枯沉零す 填澗に凝冰し 素雪庭を翳ふ

寒癘肌を切るも 執志殊ら精らかにし 林岫に契闊し 艱苦備さに嬰る

勞めて敢へて倦まず 極めて敢へて寧ろにせず 展轉して道を求め 遂に皇情に感ず

丹書緑字もて 玄名を列圖す 神仙の羽服は 錦裾飛青

鬱然として降り 火鈴を煥落す 流霞の丹輿 三素の飛駟あり

我が八門に入れば 乃ち死生を知るは 皆な行を積むに由る 苦しきかな有情は

り。
此の一偈は太上玄臺高上老子に出づ。八極を歴観するは、之を八門と謂ひ、而して此の篇を誦すなり。

【テキスト4（四丁裏三〜五丁表七）現代語訳】

無上八門開度法輪偈頌にいう

私が八門を開くと、中に玉で出来た美しい城が有り、七寶の瓊林（玉で出来た木の林）は、根がないのに生えていて、金の細い枝が互いに間を縫うように重なり、上清の天を蔭（おお）い照り映えていた。

道の教え（法輪）をもって悟りを開き彼岸に渡れば、それは真に通じて靈妙な境地に達する。

上（かみ）では照らさないものは無く、下（しも）では明らかにならないものは無い。私が見ると道士がいて、朝夕に誦經している。

（道士は）人里離れた場所で長齋して、（修行を）昼も夜も倦まずに行っている。栢（の葉）を切って昼食とし、ただの水を清らかな冷たい水のように飲む。

師の前に身をかがめて教えを受け、時間をかけることなく（すぐに教えを理解し）、单身深い洞穴を景仰し、（そこに）ひとりで宿りひとりで遠方を目指していく。

鹿と羣れをなし、林の中に身を棲まわせれば、腹をすかせた獣もその前にうずくまり、飛ぶ鳥は哀しげな鳴き声を上げる。

風雲は身に染みて悲しさを感じさせ、よろずのものは枯れて水に沈む。谷間を填めて結氷し、真っ白な雪が庭を翳う。

厳しい寒さが肌を切っても、強い志を殊らつまびらかにして、奥深い山林の中で（人とは）久しく会うことなく、艱苦は身に備さにまわりつく。

苦勞しても敢えて倦むことなく、（道の教えを）極めても敢えてそれで安心してしまうことはせず、巡り移りながら道を求め続けければ、遂には天上の大いなる神の心に感応する。

天上界の神聖な文字で、神仙となるべき者として自分の名が書き列ねられる。神仙の身に着ける羽服は、錦の帯（はかま）に飛青の文様である。

（神仙は）立派なお姿で（地上に）降りて来られ、（四方を照らす神仙の道具である）火鈴を光り輝かせ、「流霞丹輿」という天上の乗り物である赤い輿や、「三素飛軒」という三色で彩られた空を飛ぶ車をともなわれている。

我が八門に入れば、乃ち死と生を交互に繰り返す転生のことを知るのは、皆なそれまでの修行を積んだことに由る。情が有る（悟りに達していない）ということは、なんと苦しいことであろうか。

此の一偈は太上玄臺の高上老子から出たものである。世界の八方位にある世界を觀て廻り、これを八門であるといい、そうして此の篇を誦したのである。

【テキスト4（四丁裏三〜五丁表七）語釈・注釈】

（11）八門…この「八門」は、『太上玄一真人説三途五苦勸誠經』（HY四五五、以下、『法輪妙經』C）で、神格である「道」が出遊する、東、西、南、北、東北、西南、東南、西北の方位に向かつて開かれる八つの門であると考えられる。『法輪妙經』Cでは、そこから外へ出て行き、世界の八方位にあ

る場所を巡る設定になっているが、ここでは「八門」が開かれると、中に玉城と七宝の玉で出来た木の林が見えると書かれているので、この「八門」とは、世界の八方位、即ち上下方向を除く全方位から、世界の中心に至る門として、ここでは記述されていると解釈できる。

(12) 幽阜…人里離れた場所。『太上洞玄靈寶真一勸誡法輪妙經』(HY三四六、『法輪妙經』A)の冒頭でも、仙公が天台山の山中で修行していることが記されている。

(13) 仙羽服…神仙が「錦裙飛青」の羽服を着けていることは、六朝期の道典にはよく見える表現である。このことから、当時、このような神仙に対するイメージが、ある程度、固定化したものであったことが窺える。服飾史から見ると、魏晋南北朝期には、文人逸士の身に着ける冬用衣類の中に、鶴氅(かくしよう)という、裘衣の上に猛禽類の羽毛を縫い綴った、蓑状の防寒着があったことが知られている。

これは、当時、一般に想像されていた神仙の羽服を模倣したものであったらしい。当時の神仙の羽服がどのようなものであったかを知るビジュアル資料に、台湾の故宮博物院所蔵、東晋の顧愷之の『洛神賦図』(宋代模写本)がある。その絵の中では、神仙の一人が、肩に羽毛状の蓑のような形のショールを着け、腰にも羽毛状の腰蓑に似た丈の短いスカートのようなものを巻き付けている。『法輪妙經』Bは、「神仙羽服」が「裙」であると記しているので、この道典の記述と、『洛神賦図』で神仙が腰に巻き付

かけている羽毛の腰蓑状の衣類の形状は合致する。（魏晋南北朝期の羽服については、劉小雪著『我在魏晋穿什麼』（江蘇人民出版社、二〇二四年）の第三章「文人逸士服飾」の二、「鶴氅—鷲毛爲衣、取其潔目」の記事及び図版を参照した。故宮博物院の『洛神賦圖』については、ネット上の画像コンテンツ保護等の問題があり、そのまま使用はできない為、絵から神仙羽服のイラストを起こしてみた（図1）。

図1



※なお、服飾に於ける「飛青」については、どのような紋様なのか、現時点ではよく分からない。神仙の服装の表現に見える文様については、『論叢アジアの文化と思想』第31号の、「『太上洞玄靈寶真一

勸誠法輪妙經』訳注ノート」(林・浅野)の注22参照のこと。

(14) 火鈴…「火鈴」は、古靈宝經典を含めた南北朝期の道典に散見する神仙の持つアイテムの一つ。

例えば古靈宝經の『上清太極隱注玉經寶訣』(HY四二五)に「身服羅帔玉佩火鈴(身に羅帔玉佩火鈴を服す)」「(一丁裏)、上清經の『太上玉佩金璫太極金書上經』(HY五六)に、「腰帶鳳章流金火鈴(腰に鳳章流金火鈴を帶ぶ)」「(三丁裏)とあり、神仙が身に佩びる物であることが判る。また「火鈴」は、炎のような形をした、光を發して輝き照らすもの、として考えられていたようである。例えば、陶弘景撰『登真隱訣』(HY四二一)巻上の「九宮」の紫戸大神と青房大神についての記述中、「手執流金鈴(手に流金鈴を執る)」、その後細字で「各執一鈴、兩手供把之。流金鈴即火鈴也。無質而赤光。状如火爛之形(各、一鈴を執り、兩手供に之を把む。流金鈴即火鈴なり。質無くして赤き光あり。状は火爛の形の如し)」「(七丁裏)とあり、この二神が炎のような形状の、赤い光を放つ「流金鈴」という火鈴を一つずつ手に持っていることが記されている。

(15) 三素飛翮…「三素」については前掲の陶弘景撰『登真隱訣』巻中に「存目中各有紫青絳三色氣出目前。此是内按三素雲、以灌合童子也(目中に各、紫青絳三色の氣有り目前に出づるを存す。此れは是れ内に三素の雲を按じ、以つて童子を灌合するなり)」「(一丁表)と見える。また、『洞玄靈寶丹水飛

衍運度小劫妙經』（HY三二〇、※陸修靜が靈寶經の目錄を編んだ時点では未成書とされている靈寶經）には、「元始天尊言、三素者紫素黃素白素是也（元始天尊言ふ、三素とは紫素黃素白素是れなり）」（五丁裏）とある。これらの例から見ると、六朝期の道典中の「三素」は、色の組み合わせは異なっているが、少なくとも三色の気として考えられていたことは共通している。三素飛軒については、例えば『元始无量度人上品妙經四注』（HY八七）巻二の本文「並乘飛雲丹輿綠輦羽蓋瓊輪（並びに飛雲の丹輿綠輦羽蓋瓊輪に乗る）」に、南齊・嚴東が付した注に「東曰、飛雲者、三素雲也。丹赤也、綠碧也、羽旄也、蓋覆也、瓊玉也。十方大聖飛天神王、各乘丹霞之輿、碧霞之輦、……（以下略）。（東曰く、飛雲とは、三素雲なり。丹赤なり、綠碧なり、羽旄なり、蓋覆なり、瓊玉なり。十方大聖飛天神王、各々丹霞の輿、碧霞の輦に乗り、……（以下略））」（二二丁表裏）云々とあり、また、古靈寶經の『洞玄靈寶二十四生圖經』（HY一三九六）に「（後聖李君）……值元始天王乘八景玉輿、駕九色玄龍三素飛雲、導從羣仙、手把華幡、獅子白鶴嘯歌邕邕、浮空而來、同會西河之上（（後聖李君）……元始天王の八景玉輿に乗り、九色の玄龍もて三素の飛雲を駕し、羣仙を導從し、手に華幡を把すに値ふ。獅子白鶴は嘯歌すること邕邕。空に浮きて來り、西河の上に同會す）」（三丁表裏）とあるように、「三素のく」という表現は、神仙を載せて空を飛ぶ乗り物に用いられている。ここから、「三素飛軒」が、三色の気で作られた天上界の乗り物、というイメージで偈頌の中で用いられていると考えられる。

(16) 死生…死んでまた生まれること。即ち、転生の意味。

(17) 太上玄臺高上老子…この神格名は、太上の玄臺におわす高上老子、といった意味であると考える。古靈宝経の一つ、『太極左仙公請問經』卷上（『正統道藏』未収録。現存するテキストは敦煌殘簡S一三五）。以下『請問經』上卷）の冒頭部分は、「仙公稽首、禮太上太極高上老子無上法師（仙公稽首し、太上太極高上老子無上法師に禮す）」（大淵忍爾編『敦煌道教經・凶録編』、福武書店、一九七八年、八六頁上段一行目）という文で始まり、ここに「太上太極高上老子無上法師」という神格名が見える。この神格名は、『請問經』卷上では冒頭以降、經文中では「高上老子」とのみ記されている。ここから、「太上太極」は、「高上老子」を修飾する語であることができる。同じように『法輪妙経』Bでも、「太上玄臺」は「高上老子」を修飾する語であると考え、『請問經』卷上の「太上太極高上老子」と『法輪妙経』Bの「太上玄臺高上老子」は、いずれも「高上老子」という同名の神格であると考えられる。この「高上老子」は、『請問經』卷上では、冒頭の文から判るように、仙公が直接、教えを乞う師の立場にある神格である。また、『請問經』の卷下に相当すると考えられている『太上洞玄靈寶本行宿縁経』（HY一〇六、以下、『請問經』卷下）では冒頭、仙公の師は「太極真人高上法師」（一丁表）と表記され、以降は「法師」或いは「太極真人」と表記されている。この太極真人は「我名徐來勒、字洪元甫（我が名は徐來勒、字は洪元甫）」（十三丁裏）と、自ら徐來勒を名乗っている。

『請問經』巻下で仙公の師である「高上法師」が、『請問經』巻上で仙公の師である「高上老子」と同一の神格であるとすると、「太極真人徐來勒」が仙公の師であることは、『法輪妙経』Aの二丁裏にも見えるので、これは「高上老君」と同一の神格であると考えることができる。更に『請問經』巻下では、「太極真人復作奉誠頌曰（太極真人復た奉誠の頌を作して曰く）」（四丁裏）とあり、「太極真人」が十戒を奉ずることに關する頌を作ったことが見える。この頌と、『法輪妙経』Bの「無上八門開度法輪偈頌」は同じものではないにせよ、仙公が偈頌を通して師から教えを受ける、という構造は共通している。但し、『請問經』巻下では、仙公は直接、頌を通して「太極真人」である「高上法師」から教えを受けるのに対して、『法輪妙経』Bでは、太上玄一真人が、『法輪偈頌』三篇の一つとして、「高上老子」から出た偈頌を伝授する、という形になっている。『法輪妙経』Aで示される師弟関係では、「太極真人徐來勒」は、かつて仙公を教えた過去の師であり、直接、仙公が教えを受ける今の師は、三人の「太上玄一真人」である。『法輪妙経』Bでも、偈頌の伝授の場面に於いて、「高上老君」の頌が、「太上玄一真人」を介して伝授されることで、これまでの太極真人徐來勒と仙公の師弟関係を過去のものとし、新たに太上玄一真人と仙公の師弟関係を構築していることが指摘できる。また、ここから、『法輪妙経』の成立が、『請問經』より後であると推測される。（『法輪妙経』の成立時期を含めた考察に関しては、林佳恵の拙論「古靈宝経に於ける『法輪罪福』の位置付け―陸修靜による靈宝經典分類の再考」（『東洋の思想と宗教』第四〇号、二〇二三年）を参照のこと。）なお、時代は下るが、『道

門經法相承次序』（HY一―二〇）巻下の二丁裏には、神格化された老子である「太上老君」の尊神名、「玄中大法師」の持つ十号が列記され、四番目に「高上老子」が見える。

（18）八極…「八極」は、一般には四方（東西南北）と四隅（乾、坤、巽、艮）の八方、また八方全土を言う。乾は西北、坤は西南、巽は東南、艮は東北を指す。但し、ここでの「八極」は、『法輪妙經』C（注11参照）で、神格である「道」が八門を出遊して赴く八つの無極世界のことを示していると解釈される。その八つの無極世界とは、東極世界、西極世界、南極世界、北極世界、東北世界、西南世界、東南世界、西北世界の八つの世界である。

【付記】

『法輪妙經』Bは、僅か七丁の短い經典であるが、今回は、テキスト2〜4（二丁裏二〜五丁表七）までを、訳注ノート（二）として公開した。偈頌三篇のうちの、「轉輪滅度行業偈頌」と「轉輪命根未盡偈頌」二篇を含む残り約二丁分の訳注は、次回、訳注ノート（三）として公開する予定である。